法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

国府犀東

国府，種武

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
27
(終了ページ / End Page)
31
(発行年 / Year)
1970-03-27
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019238

国府犀東

国府種武

犀東というのは私の父の号である。金沢は二本の川が町を貫流しているが、東のは浅野川で、西のは犀川である。浅野川は女性的な静かな川であるが、犀川は男性的で砂礫の問を激流とまでは行かぬが、早い流が勢よく流れている。父は犀川の東の竪町に生れたので犀東という号をつけたものである。室生犀星は、まるで時代はちがっているが、犀川の西に生れたので犀西というわけだが、これでは詩人の号としてつまらぬので、西を星に変えて犀星としたものであろう。もう一人金沢の出身で美術評論家に坂井犀水（明治四ー昭和一五）という人がいったが、この人は犀川のどの辺で生れたかは明らかでない。

父は明治六年に生れた。種徳というのがその名であるが、これは徴兵忌避のため廃絶していた国府という士族の家を嗣いだ時改めたもので、もとは鹿島長松という平凡な名であった。鹿島は前田家出入の左官職であったらしい。四高同窓会の名簿にはいつまでも括弧して旧性鹿島長松となっていた。父は長じて竪町小学校に入った。上級に泉鏡花、徳田秋声、小倉正恒、井上友一、清水澄、藤岡作太郎がいた。藤岡は絵が巧く八犬伝の絵を写していて見せたりした。父は八犬伝はじめさまざまな本を藤岡に借りて読んだらしい。その頃の金沢の青年達の動きは秋声の「光を追うて」に詳しく出ている。そこには「その頃から漢詩を作っていた国府とも往来していたので、大塩中斎の洗心洞劄記とか、その根元の王陽明の伝習録といったようなものをも、手写したりしていた。」

「等は或る時国府の家の二階で広瀬淡窓の詩を読まされ、ひらめの詩に感心している彼の鑑賞眼を羨しく思ったことがあった。作詩はほんの少しばかり兄から教わったのだったが、要学便覧程度のものだったので、国府の造詣は計り知るべくもなかった。」とある。

この中に出て来る青年達はその多くが新設された四高に進んだ。秋声は四高を中退したが、父は卒業して東大政治学科に進んだ。それは恰度一木喜徳郎が洋行から帰って国法学を講じた年であって、家には毛筆で書いた当

時のノートが残っていた。父の話では一木は上気した面持で講義し、心なしか声も少し震えていたという。一木は大変な意気込みで新しい講義に当ったものらしい。

東大には何年いたか分らないが、その頃既に文章で食える見込みがついたものらしく、中退して新潟の新聞の主筆に五十円の俸給で赴任した。新潟は原敬なども新聞記者をしたことのある土地である。また奇しくも秋声も父より先に長岡で新聞記者をやっている。

こうして父はジャーナリストとして先ず出発したのである。父の一生を順に書いてもつまらないので、明治、大正、昭和の三代に亘っての生活を仕事の上からいくつかの側面に分けて述べることにする。

一、ジャーナリスとして

新潟の新聞を振り出しに、明治三十三年には台湾日報(?)に行っている。これは半年程でやめた。年月がはっきりしているのは、私の生れた年だからである。当時台北はまだ物騒で、父が劍潭寺の前の川で舟を浮べ月見をしていたところ突然銃丸が飛んで来たということである。当時台北の西門町に孫文が潜んでいて革命のための軍資金をほしがっていた。父は台湾総督に話して見たが話があわず、やっと台湾銀行の一柳が出してくれた。孫文はその金で武器弾薬を買って上海に送ったが、船が途中で沈んでしまったという。

台湾から帰って博文館に入り、「太陽」の主筆となった。博文館時代は暫く続いたようである。大橋乙羽、坪谷水哉が一しょであった。恰度日露戦争で、戦争実記か何か写真入りの特輯が当った時である。この時代に出した小冊子が手許にある。「竜吹鶴語」(三三年博文館)「花籃集」(三五年新声社)「菩提達磨」(三二博文館)である。隆文館から出た時文叢書第四巻「犀東文集」(四二年)はもう少し後のことである。この頃文武堂から出した新体詩集「花ざくろ」は樗牛と桂月が序文を書いていて、詩より序文の方が価値あるようなものだが、当時流行の新体詩を自分もやるといって、二、三日で作ったものらしい。日夏耿之介の「詩史」の評判はあまりよくないが、九鬼周造にいわせると日本の詩には押韻がない、しかしやれば出来るものであるといって、「文芸論」の中で自分も試みているが、「花ざくろ」の詩には押韻がしてあった。

博文館をやめてからはまた新聞に戻った。はじめ「万朝報」にいたらしいが(上司小剣「U新聞年代記」)、後には「東京日々」の前身「毎日電報」に移って主筆になった。当時家が橋場にあって、父は毎日「タキ」という車夫の人力車で有楽町まで通っていた。その頃の新聞記者の自家用車は人力車であったことになる。父は所謂文士の一人だが、軟派でなく、新聞の社説などを書く硬派の文士であった。

二、漢詩人として

十一歳から詩を作ったという。師は金沢の禅寺の坊さんであった。平仄を勉強するのに白黒の碁石を並べたという。私の手許に偶然若い時の詩の稿本が一冊あるが、その出来栄については疑問である。とにかく早くから文名が揚ったというのは、当時世間の受けのよかった漢文調の文章のせいもあるが、また漢詩のせいもある。伊藤博文に会いに行った時、君は漢詩を作るそうだがといってすぐ会ってくれたそうである。父は一生にどれだけの詩を作ったかは分らない。雑誌などに発表した他、旅行先の旅館の女中さんなどに書いて与えたり、地方の有力者に頼まれて書いて送ったものも入れると随分多作であったといえる。私は手を入れすぎた雑誌発表のものより旅館の女中さんに与えたような即興のものの方がいいものが多いと思っている。父の好きな詩人は王漁洋であるが、私が高等学校の宿題で「高青邱と呉梅村」というのを書いていると、そういう詩人より唐以前のものの方がいいといっていた。

父の詩の残っているものは、明治では「太陽」に載せたもの、大正では高橋月山主宰の「大正詩文」に載せたもの、昭和では自分で主宰していた「詩林」に載せたもので、旅館の床の間にあるものなどは集めようもない。他のものがある時期に限られているのに漢詩だけは一生を通じて作っていた。晩年千葉県の竹岡に疎開しても目前の富士の詩を毎日数首作っていたそうである。

三、学者として

父を今日の意味で学者と呼んでいいかどうかは疑問である。しかし明治の時代にはあれで十分学者で通ったのである。父は所謂博覧強記、和漢の書を読んでいたからこそ、硬派の文士として論説が書けたのである。しかし専門といば支那学と日本の歴史であろう。支那学は内藤湖南と親しく、父が明治三十三年に台湾の新聞に行ったのも湖南の推薦によるのでないかと思われる。また後に湖南が京都大学へ入る時、文科大学長狩野亨吉の意を受けて湖南の説得に行ったりしている。湖南ははじめ秋田から代議士として出ようとしていたらしい。また朝日新聞で大学の出すくらいの金は出すから朝日に止まってゆっくり研究でもしていてくれといったのを、到頭ふり切って京都大学へ入ったのである。湖南は京都の支那学の総師になったが、父も何かしら支那学で論文でも書きたかったらしい。特に周の制度がやりたくて、一九二〇年渡欧の時も仏国でシャバンヌの本など買って来ている。それだから私が法科を出て役人にでもなるという親の期待を裏切って哲学をやるといった時も、哲学は西洋か支那か、支那なら家に本もあるし、知人も沢山いるがといってくれたが、私はまたそういう親の世話になるのが嫌いでたまらなかったし、支那哲学はやる気がしなかったので、独逸語の方が漢文よりましだからといって桑木博士の弟子になってしまった。そのくせ実は独逸語も大したことはなく後にカントを読むのに苦しめられたのであ

る。

日本の歴史では内閣や宮内省で有職故実的な方面の仕事をやって御大喪、御大典、神社の昇格、叙位の審査、親王や内親王の名づけなどをやっている。例えば三笠宮の幼名などは父のつけたもので、そのため正月にはいつも宮家へ挨拶に行って歓待されたらしい。

四、役人として

父ははじめジャーナリストとして出発したが中途から役人、といっても官庁の嘱託の方へ鞍替えした。そのはじめは明治四十一年の内務省地方改良事業で、「日本の百年、明治の栄光」によれば「当時内務省地方局には床次局長のもとに、市町村課長中川望、府県課長井上友一、事務嘱託留岡幸助、国府種徳らの社会事業の熱心家たちがそろっていた。なかでも地方改良の本尊とよばれ、床次、中川とともに全国を風靡する名望をになったのがのちの東京府知事井上友一である。」この井上は徳田秋声の「光を追うて」の中に出て来る幼時の友井上友一である。父は井上の手引で官界に入ったのである。

地方改良は報徳会と共通の点が多かったので、父は報徳会にも頭を突込み「斯民」にも殆ど毎号文章を載せている。また思想善導の弘道会というのもあってその機関誌「弘道」にも度々書いている。

内務省ではじめた嘱託稼業は、内閣になり、宮内省になり、鉄道省になり、文部省になり、東京市になり、警視庁になり、逓信省になりといって止まるところを知らず、一時は十に近い嘱託を引受けていた。しかし中心は内閣であり、ここでは神社昇格や叙位の他に、天皇の出す勅語、詔書の下準備に当った。勅語や詔書は個人の作ではない。ある一人が原案を書いて、数人の人が意見を附し、それらの人の合作としてまとめられ、天皇の名で発表されるのである。父が中心になってまとめたらしいものには「国民精神作興の詔書」がある。父はまた内閣嘱託として大喪使や大礼使の仕事もやっている。いずれも記録の作製である。他の官庁の嘱託というのは多く大臣の訓辞や祝辞を直してやる仕事である。例えば此間まで文部政務次官をやっていた久保田藤麿は若い文部省官僚の時代に渋谷栄通りの父の家にその用で度々来たといっていた。勅語や詔書と同じく自分で書いても自分の名で残らぬものが他にもある。それは碑文である。父の書いた石碑は全国に相当ある筈である。しかしそれは大臣や知事の名になっていてほんとうの作者である父の名は全く埋れてしまっている。考えてみれば大臣や知事が漢文で碑文の書ける筈はないのである。

父が嘱託でなくやっと本物の役人になったことが一度ある。それは宮内省御用掛である。その仕事は今の天皇の摂政時代地方を旅行する時、ついて歩いてその記録を作る役である。これは大正十一年の四国行啓、大正十二年の台湾行啓の時ついて行った。台湾行啓の記録の下準備を手伝わされて新聞の切抜きをした。消毒してパラフ

ィン紙に包んであった新聞の強い匂いは今でも忘れることが出来ない。父はその時供奉服という学習院の教師のような制服を着てやや滑稽であったが、本人も家族も得意であった。宮内省入りをしたというのは宗秩寮総裁に紀州の殿様徳川頼倫がいたからである。父は頼倫の漢詩の師を久しくやっていた。もう一つ頼倫のやっていた史蹟名勝天然記念物保存協会にも関係していて、一時はその機関誌を家で編集し私も慶応出の樋口竜太郎と共に手伝わされたことがある。史蹟名勝天然記念物法制定のため欧米の関係法規を知る必要が起り、父は内務省のために渡欧した。その時平素あまり金をくれない宮内省が壱千円出してくれた。これは一九二〇年のことである。父は主としてロンドンのネーヴィホテルに泊っていた。漱石が貧しい下宿にくすぶっていたのに比べ、自分はホテル暮しだと威張っていた。当時ロンドンに駒井権之助という日本人がいて、その奥さんは英国人でオペラの女優であった。その人の手引でロンドンの詩人達と交際した。駒井は漢詩、和歌、俳句を立ちどころに英訳するという芸で名を博していたから、父も漢詩人というので歓迎された。持って行った宮内省嘱託という名刺はあまり役に立たず、却って慶応義塾大学教授の方がよかったという。しかし詩人であることは英国ではもっとよかったにちがいない。この筋の仕事で後に風景協会とか風景院とかに関係し、名勝地や国立公園の審査に当った。

五、教師として

かなり長く慶応の予科の漢文の教師をしていた。年度末になると答案を塾監局に届けに行かされた。若い学生に老子を教えたり、作詩法を教えたりしたもので、此間死んだ奥野信太郎も予科で習ったといっていた。慶応百年記念の催の一つに物故教職員の追悼式があり、私にも案内が来て驚いたが、考えてみれば父も物故教職員の一人に当るのであった。

結　語

色々の側面から父の一生を眺めて来たが、父はジャーナリストにも徹せず、官僚は万年嘱託で終り、学者といっても今は通用せず、気の毒な生涯であったが、漢詩人としてだけは一生詩を続けた。弟が友人迫水久常に芸術院入りの運動を頼んだ時、迫水は君のお父さんは御用詩人だから駄目だといった。そこが在野の国分青崖とのちがいである。しかし二人とも所謂明治百年の最後の漢詩人となった点は同じである。今後この二人の詩に迫りうる人はもはや出ないのでないかと思う。

今偶々手許に残っている、人に頼まれて送らずに終った唐紙に書いた詩があるので掲げておく。私はこの詩はすらっとして出来はいい方だと思っている。

金城客中打講後偶拓

人誇郷味在霜螯　啜粥却如禅衲逃。
一飽舌頭紅萬文。　餘高於大白山高。